

潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata

第 6 号 2017年3月
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、
潟の魅力と価値を再発見・再構築。

- ・里潟の未来を見つめ、ひろげる…………… P. 2
- ・山川草木悉有仏性…………… P. 3
- ・佐潟と赤塚砂丘を一体化したレクリエーションゾーン構想… P. 4
- ・潟研とびっくす ワイスユース (wise use) ってなに? … P. 6
- ・郁丸が探る川にいがた「潟」伝説・アンナ隊長「潟を食べる!!」… P. 7
- ・潟のエッセイ…………… P. 8



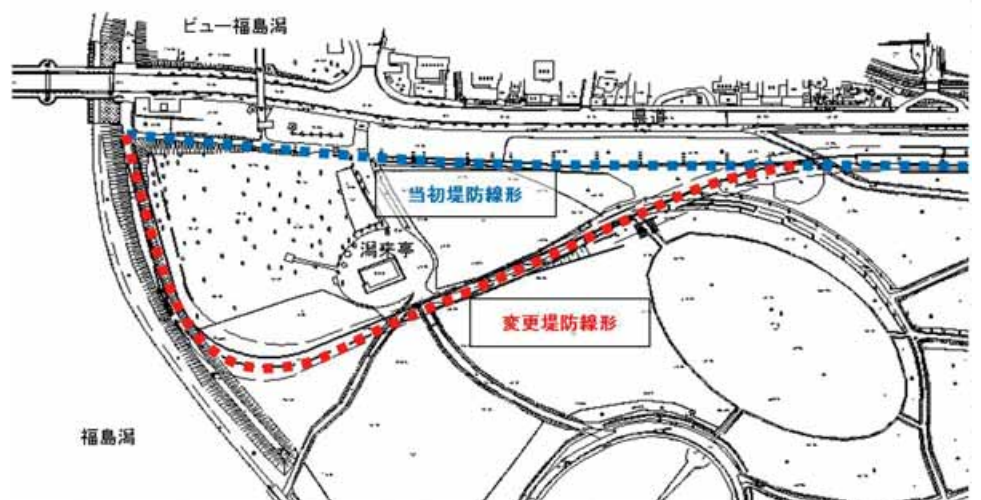
堤防整備後（現在）の福島潟周辺

新潟市北区にある福島潟の河川改修事業（新潟県）が、土木学会デザイン賞奨励賞を受賞しました。
土木学会デザイン賞とは、公益社団法人土木学会景観デザイン委員会が主催する顕彰制度として、2001年に創設され、正式名称は「土木学会景観・デザイン委員会デザイン賞」といいます。
今号では、これを記念して、事業主体である新潟県新潟地域振興局地域整備部からの受賞報告を掲載します。

福島潟が土木学会デザイン賞を受賞！

志田 俊彦 新潟県新潟地域振興局 地域整備部 治水課

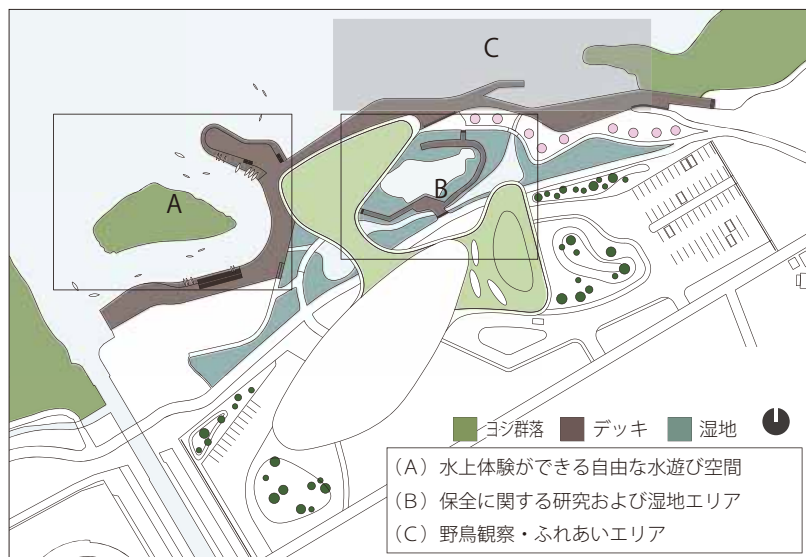
このたびの「福島潟の河川改修事業」の、土木学会デザイン賞奨励賞受賞概要について報告します。
デザイン賞の対象は、ビュー福島潟の公園内に整備した堤防であり、堤防としての機能のみならず、公園の景観に配慮したデザインとした点が評価されました。
従前の河川改修計画では、公園に隣接している県道と並行して堤防を整備する予定でした。しかし、堤防を整備することにより、公園利用者や観光に影響を与え、公園の美観を損なうおそれがありました。そこで、公園と一体化した堤防となるよう、公園の利用と景観に調和する堤防デザインとしました。
具体的には、公園内の施設よりも福島潟側に堤防の法線を見直し、施設を利用しやすい位置としました。その際、法線にカーブを取り入れるとともに、既設園路のアプローチを活かすことで、遊歩道としても活用しやすい線形としました。堤防を整備したところ、公園利用者から、「堤防を乗り越えなければならないといった抵抗感がない。」との感想をいただきました。
福島潟が土木学会デザイン賞を受賞することができたのは、多くの関係者の方々のおかげです。協力いただきました皆さまへ感謝の気持ちと御礼を申し上げます。



里潟の未来を見つめ、ひろげるー鳥屋野潟から始める 潟の魅力発信にむけた施設ー

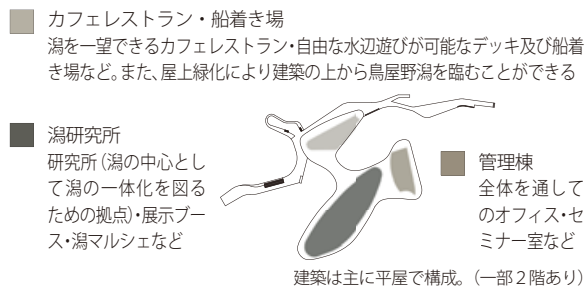
佐藤 美樹 長岡造形大学造形学部建築環境デザイン学科 4年

長岡造形大学に在籍する佐藤美樹さんが、卒業制作として、小さい頃から身近であったという鳥屋野潟をテーマに研究をしたそうです。その成果を寄稿してくれましたのでご紹介します。



ヨシ群落を大きく開いて設けたデッキ(A)からは、順光射す美しい鳥屋野潟を眺められると共に、市街地をバックにカヌーに乗って遊ぶ姿(A)が見えるように。散歩コースでもある一部の既存園路は残し、湿地エリア(B)をはさみ形で建築を配置し、鳥屋野潟へ視線をあげさせています。

湿地エリア(B)は在来種のみで構成する人工湿地とし、アプローチから潟への景観誘導と共に野鳥のえさになる昆虫類や底生類が暮らす生息空間をつくります。また、デッキに沿った野鳥観察エリア(C)には、冬に渡来したカモやマガンが集まり、阿賀野市の瓢湖のように餌やりができる、間近で野鳥と触れ合えるポイントとし、冬の賑わいを見せてくれればと思っています。



研究背景

新潟市に点在する潟は、1つのアイデンティティとして多くの市民に親しまれている存在です。

1911年頃まで潟は約30存在し、漁業・農業・狩猟など人の生活基盤として活用が多くされていました。

しかし、現在残っている潟は半数となり、その減少した背景には過去における水との闘いからの克服や干拓、生活の充実を求めた人々の生活環境の変化が伴っていると思われます。

そうした変化の中、残された「潟」が新潟市の自然の象徴であると共に市民にとっての憩いの場、「故郷」としてアイデンティティを再確認できる場として再認識されはじめています。

故に、私たち新潟市民は潟の存在価値を未来に残していくべきなのではないでしょうか。

現在の「潟空間」の利活用を見つめ直すと共に、未来に残していく為の啓発の場が必要だと考え、本研究のテーマとしました。

未来の鳥屋野潟

鳥屋野潟は、魅力あふれる空間を持っています。

自然環境・アメニティ・観光…など、様々な方向からの意識が高まり、それらを発展させていく中で鳥屋野潟の抱える問題点の改善を目指す必要もあるのではないのでしょうか。

本研究では、それらの改善の一步と共に潟と密に関わることが出来る場所を提案・計画しました。

主なプログラムとして「潟の研究所」「ひらかれた空間」「ビジター

センター」の3つの機能を持つ構成としています。

潟の専門家(研究者・指導者)や研究生といった学生、そこに市民が参入することで一定数の利用の形を目指します。

I. 潟の研究所 (潟の拠点)

鳥屋野潟を中心とした生態系の保全に向けた調査・研究を行います。また、市内に点在する潟の中心として潟の一体化を図るための拠点となります。

II. ひらかれた空間 (市民の場)

専門家のみならず、カフェなどを併設することで市民にもひらかれた、いつでも訪れることが出来る空間とします。

同時に「自由な水辺遊びが可能な環境」を計画し、誰もが潟をより近くに感じられる賑わいの場に。

III. ビジターセンター (学習の場)

新潟市の潟の案内や鳥屋野潟の情報展示など、研究所と連携したビジターハウスを併設します。

ピオトープや泥田などを使った景観体験を行い、保全への意識を向上・促進を図っていきます。

さいごに

小さな頃から身近にあった鳥屋野潟。今回卒業制作の舞台として選定したことでそこが持つポテンシャルの高さに気づく反面、まだまだ市民に知られていない現状があることを知る良い機会となりました。

今後の鳥屋野潟が今以上に新潟市民の皆さんにもなじみ深く、いつでも訪れて楽しめる環境になることを卒業制作を経て願っています！

最近、新潟の潟を訪れることが多くなった。2014年4月に新潟市に潟環境研究所の所長を、また2015年4月に水の駅「ビュー福島潟」の名誉館長をおおせつかったからである。改めて、多くの潟で山を背景として前面に水面が広がる景色が展開し、「われわれの魂が還りたがる空間」だと癒されている。白鳥やオオヒシクイが、この景色を空から眺め、居心地のいい場所として毎年還ってくるのも、むべなるかなと思う。



佐潟 [写真提供・佐藤安男]
角田山を背景とした水面に飛び立つ白鳥が美しい。ただ、左のゴルフの練習場は弥彦山を隠しており、新潟人の“心の故郷”がふさがれているようだ。

日本には古くから、「山川草木悉有仏性」という考え方がある。これは、山川草木、すなわち人間のみならず自然界のあらゆるものに仏の心があるという考え方である。鎌倉時代に、法然や親鸞の浄土教的な仏教や道元の曹洞宗が普及するにつれて明確になったとのことであるが、この考え方は、縄文時代から自然のあらゆるものに神が宿ると考えてきたことの延長上であり、われわれ日本人にとって違和感のない考え方であったのではないかと思う。

ここで大切なことは、人間が自然を征服・支配するといった西洋文明の考え方ではなく、自然の中のあらゆるものは、無機物であろうとも、“いのち”の連鎖の中で最後は土と水と大気に還るといった時空間に存在し、すべて平等であるという考え方である。

しかし、平等でありながら、人間だけは“我”があり、“欲”があり、その世界から外れてしまう。他の命をむやみに収奪するうしろめたい存在である。そのうしろめたさを少しでも自覚したいと、せめてお盆の期間だけは殺生をしないと、食事をするとき、いただく命に感謝して「いただきます」という言葉を発するようになったのではないかと思う。

さらに、人間は生きているうちはどうしても穢^{けが}れてしまうので、せめて死後は自然に還り、浄化されたいと願うようになったということである。ただ、その還っていく先の自然は、なにも深山幽谷でなく、鎮守の森などわれわれの身近にある山、川、森、海辺で、「故郷」としてアイデンティティを確認できる『場』であれば良かった。

この思想を体現している人物として、良寛や小林一茶などを思い浮かべるが、私の経験では映画『阿賀に生きる』（監督・佐藤真、1992年完成）に登場した老人たちから、かつての日本人であるならば誰もがこの思想を有していたことを教えられた。『阿賀に生きる』の老人たちは、新潟水俣病を患いながらも、窓ガラスの破れ目から室内に入り込んできた朝顔を愛で、鮭の鉤流し漁に自然との共生の根本を語っていたのである。

しかし、日本は、明治維新以降のこの150年間、国力発展のために、西洋近代科学思想を導入し、自然の恵みを徹底的に収奪し、自然災害はわれわれの敵として撲滅することを金科玉条としてきた。しかし、第2次世界大戦ではアジアだけでも3,000万人を超える死者を出し、戦後の高度経済成長の果てには、自然災害を克服できないまま多くの死者を出し、水俣病や福島原発事故では取り返しのつかない自然破壊、人間破壊を繰り返している。

21世紀は、このことを反省して、自然と共生する以外に歩む道はないと考えられるようになった。そのことはラムサール条約（1971年制定）や生物多様性条約（1992年制定）などで、すでに世界的には確認されていることなのだが、まだ人類はその域に達していない。

われわれは、縄文時代以来、生き物を大切に、ラムサール条約でいうワイズユース（賢明な利用）を実践してきた。「山川草木悉有仏性」という優れた思想を復活し、世界に広めることで、改めて自然との共生を確かなものにする時代へと進みたいものである。



佐潟の遊歩道を歩かれた経験をお持ちの方は多いと思います。しかし、佐潟を取り巻く砂丘まで足をのびされた方はほとんどいないのではないのでしょうか。本稿では、佐潟周辺に広がる砂丘（以下、赤塚砂丘）の学術的な意味を紹介し、ついでこの一帯の環境と景観そして農業を活かした新潟市のレクリエーションゾーンとしての利用をはかることを提案したいと思います。

1. 残存する砂丘地形

佐潟、越前浜、四ツ郷屋にかけての砂丘には、土地改良によって平坦化された農地が広がりますが、かつては大きくうねるような起伏がありました。その起伏が何に由来するものだったのかを、土地改良以前の古い写真（1948年撮影）を使って詳しく調べてみました。その結果、この一帯には図1に示したような「パラボリック（放物線）砂丘」という地形があちこちに見られ、これが大きな起伏をつくっていた原因だとわかりました。この地形は、冬季の強い季節風によって砂丘の砂が飛ばされた結果、風上側にU字の口が開く谷のような形状になったもので、かつてはこれがずらりと並んでいたと考えられます。この地形は現在ほぼ姿を消しましたが、調査の結果5つほど残存し、そのうちの一つはほぼ完全な形をとどめていることがわかりました。新潟砂丘ではここだけに見られる貴重な地形です。

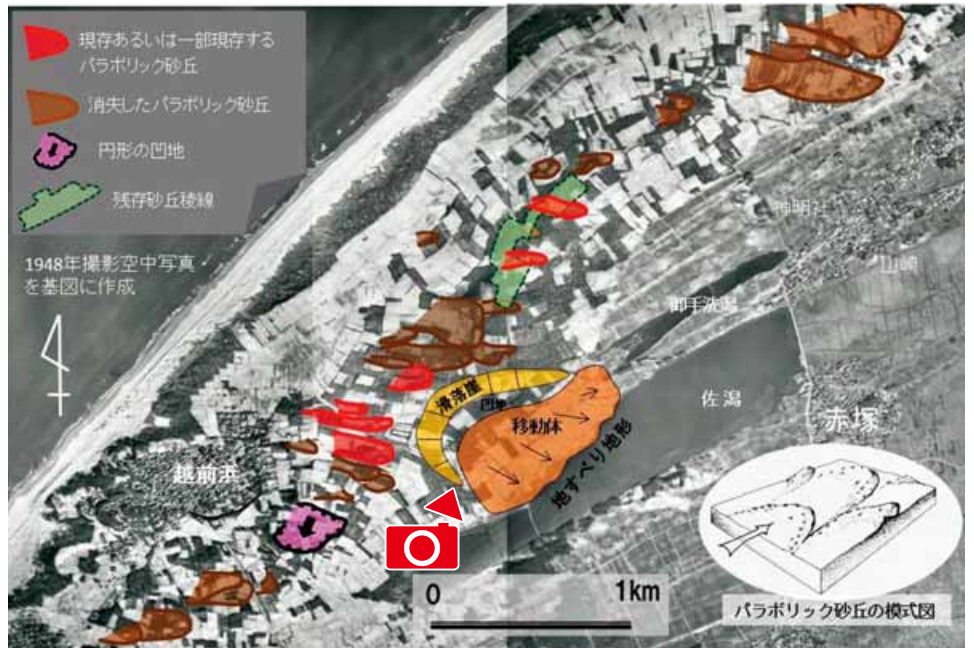


図1 パラボリック砂丘の分布と地すべり地形

2. 珍しい大規模地すべり地形

地図を見ると、佐潟の北岸の湖岸線は潟側に大きく円弧状に張り出して、潟の幅が狭くなっているのがわかります。その原因は意外なものでした。実は佐潟の北側の砂丘は大きな地すべりを起こしていたのです。それによって移動した土塊（移動体）が佐潟のかつての湖岸線を越えて押し寄せたのです（図1）。通常、地すべりは第三紀層と呼ばれる地層や火山地域に多く分布し、砂丘の中にこんな大規模な地すべり地形が存在するという例はこれまで知られていません、地形学的にも重要なものです（写真1）。なお、この地すべりが、いつ、どのような要因で発生したのか、まだわかっていません。今後の研究が期待されます。



写真1 地すべり地形全景（図1の赤丸から赤矢印に向かって撮影）

3. クロマツからエノキへ

かつて、この地域の砂丘にはクロマツが植えられ、薪炭林あるいは防砂林としての機能を果たしていました。しかし、燃料革命によりクロマツ林は薪炭林としての価値を失いました。管理が行き届かなかった林は藪と化し、さらにマツクイ虫の被害が重なって1980年代以降急速に衰退しました。これに代わって定着したのがエノキという落葉広葉樹です（図2）。現在、この地域にみられる高木の85%以上がエノキです。エノキは枝ぶりが独特で、ずっしりとした安定感があります（写真2）。タブやシイなどの照葉樹林は林床が暗く散策には向かないのに対し、エノキなどの落葉広葉樹林は下草を刈るなどして整備すれば、明るく実に気持ちのよい散策の場となります。また鳥類や昆虫類、蝶などの繁殖場所となり、生物多様性の観点からも大きな意味があり、自然観察に

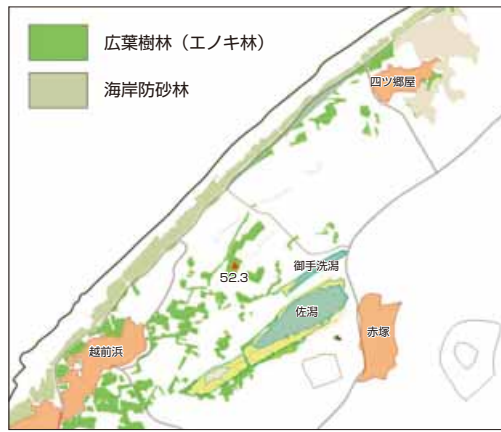
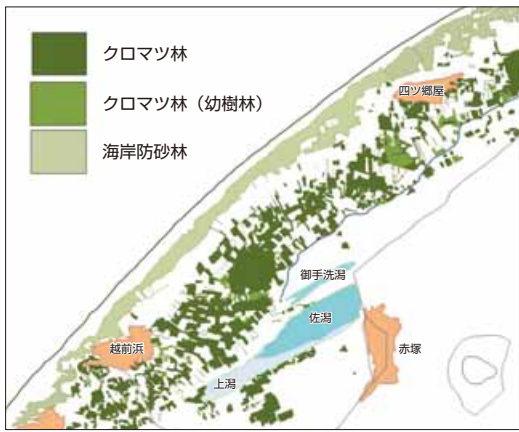


写真2 エノキの枝ぶり

図2 1948年におけるアカマツ林の分布(左)と2005年における落葉広葉樹林(エノキ)の分布(右)

も向きます。

4. 驚きの大根1,000万本！

佐潟周辺は日本でも有数の砂丘地農業地域であり、広大な農地が展開します。そこでは季節に応じたさまざまな作物が栽培されます。3月には銀色のビニールトンネルの縞模様が砂丘を覆いつくします。スイカ、サツマイモ、タバコなどなど、成長期のスプリンクラーによる灌漑も見ものです。秋には、一面が大根畑に変わり農家の方々が収穫に勤しむ姿がみられます。そこから出荷される大根は毎年1,000万本超！新潟市内にお住まいでも、この砂丘農地をご覧になったことがある方は少ないのではないのでしょうか。新潟のもう一つの農業景観として、一見の価値があります。

5. レクリエーションゾーンとしての整備とその意義

佐潟は、地元の方々の熱心な活動によって、その価値が新潟市内外に知られるようになり、訪れる人も多くなってきました。しかし、周辺の砂丘に目が向けられたことは、これまでほとんどなかったと思われます。佐潟の水は砂丘に降った雨水が深く浸透して、地下水となりそれが湧き水となって湧出したものです。その意味で両者は完全に一体の系であり、切り離して考えることはできません。

ラムサール条約登録20周年を契機に、佐潟とその周辺の砂丘を一体化した利用と保全を考えてみてはどうでしょうか。具体的には、佐潟から砂丘へアプローチし、上述した地形や樹林地そして農業景観を観察しながら歩くハイキングルートを設置するので(図3)。ルート上には観察ポイントをおき、説明版を設けます。見晴らしのよい場所には屋根つきの休憩所が設置できれば理想的です。天気がよければ、西に日本海と佐渡島、東に越後平野を隔て鳥海、朝日・飯豊連峰から守門、越後三山、巻機、苗場と続く山々を望むことができます。野菜の収穫期にはハイキングと野菜採りを兼ねたツアーを農家との契約で企画すれば、より充実した体験となるでしょう。エノキの樹林地の保全・整備は、水の保全にもつながります。このようなレクリエーションゾーンの設置が可能となる砂丘地は、日本でもここしかありません。新潟市の事業として取り組む価値は大いにあるのではないのでしょうか。



図3 佐潟・赤塚砂丘ハイキングルートと観察ポイント

- 観察ポイント**
- ①水鳥・湿地センター
 - ②浜堤列Ⅱと新砂丘Ⅲの境界
 - ③鷲山稜線から360° パノラマ
 - ④パラボリック砂丘 (上方から)
 - ⑤パラボリック砂丘 (下方から)
 - ⑥御手洗潟南端の地形
 - ⑦地すべり滑落崖
 - ⑧パラボリック砂丘と佐渡の眺望
 - ⑨地すべり移動体
 - ⑩地すべり全体俯瞰
 - ⑪地すべり移動体上の微地形
 - ⑫中道
 - ⑬上潟俯瞰
 - ⑭アメダス測候所
 - ⑮佐潟全体俯瞰
 - ⑯湧水地
 - ⑰馬蹄形凹地連続区間
 - ⑱浜堤列Ⅰの浜堤と堤間地

ワイズユース (wise use) ってなに？

皆さんは「ワイズユース (賢明な利用)」という言葉を知っていますか？日常の中では、なかなかその言葉に出会う場面がないかもしれません。この言葉はラムサール条約と非常に深い関係があります。

当研究所では、平成28年7月～8月にかけて、20歳以上の市民2000人を対象に、潟に関するアンケート調査を実施し、右図のような結果が出ました。そこで、今号では、皆さんに、ワイズユースがどんなことなのか知ってもらおうということで、市民が取り組む2つの事例についてご紹介します！

その前に…

そもそもラムサール条約におけるワイズユースって???

ラムサール条約では、人間の行為を厳しく規制して湿地を守っていくのではなく、湿地生態系の機能や湿地から得られる恵みを維持しながら、私たちの暮らしと心がより豊かになるような湿地の活用をワイズユース (賢明な利用) といいます。ワイズユースは、健康で心豊かな暮らしや産業などの社会経済活動とのバランスがとれた湿地の保全を推進し、子孫に湿地の恵みを受け継いでいくための重要な考え方なのです。

新潟市における潟のワイズユースの事例紹介

国内でよく参考事例として挙がるものとして、蕪栗沼 (宮城県) ふゆみずたんぼのような生態系に配慮した「持続可能な産業 (農業・漁業・観光)」、片野鴨池 (石川県) の坂網猟のような「伝統的な知恵と技」、バードウォッチングやカヌー体験のような「憩いと遊び」がありますが、今回は「食」という面から新潟市の事例を見てみましょう。

①とやの潟ウィンターキッチン (平成29年2月～3月)



メニューの1つ「鯉の赤ワイン煮込み」一度揚げて独特のクセを消し、味噌を溶かした赤ワインで煮込んでいる。

←この取り組みは新潟市の「潟の魅力創造市民活動補助金」を活用。

鳥屋野潟から冬の新潟の魅力を発信する目的で、鳥屋野潟漁業協同組合の協力のもと、新潟市南商工振興会主催で「とやの潟ウィンターキッチン」が開催されました。漁師がとったコイやメナダ (地元ではボラと呼ばれている) を使い、鳥屋野潟周辺レストランのシェフが、オリジナルメニューとして考案し、期間限定で提供するという企画です。

今年は終了しましたが、地元の人々が長年親しんできた食べ方とは異なる斬新なメニューが、お客さんにも好評だったそうです。このような取り組みが継続されることで、再び鳥屋野潟の魚が地域に根付いたものになっていくのではないのでしょうか。

②鳥屋野潟の恵みを考え、食する会 (平成29年2月)

新潟市中央区の長潟地区で、山潟地区コミュニティ協議会と鳥屋野潟漁業協同組合が企画した「鳥屋野潟の恵みを考え、食する会」が開催されました。約20年前に地域の人たちが始めた会ですが、今回で18回目を迎え、今では、地域住民や関係者を含め、幅広い世代から100人以上が集まるまでになりました。今回は当研究所も参加しました。

会では、地域の人たちが作る、鳥屋野潟の鯉の団子汁、ライギョの天ぷら、スジエビの素揚げなどがふるまわれました。漁師たちが「川魚独特のクセを活かす食べ方」とこだわった鯉の旨煮や鯉こくに、参加者の中では懐かしいと思う人もいたように見受けられました。

かつて鳥屋野潟と周辺の田や水路では盛んに漁が行われていましたが、その様子を知る人々は少なくなっています。試食会の前に勉強会として鳥屋野潟に関する講演もあり、鳥屋野潟の過去と未来の話聞いた後に食べる鳥屋野潟の恵みは、とても味わい深いものとなりました。

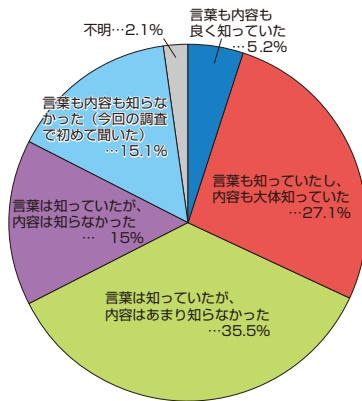


漁協による準備の様子。いとも簡単に魚をさばっていく。

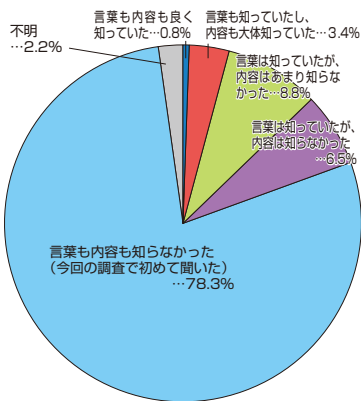


漁協特製「鯉の旨煮」。酒、醤油、みりんで煮た豪快な一品。お酒との相性も抜群！

■図1 ラムサール条約の認知度

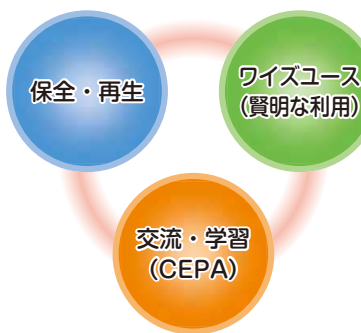


■図2 ワイズユースの認知度



ラムサール条約の認知度と比べ、「ワイズユース」という言葉も内容も知らなかった人が約8割弱という結果に…

■ラムサール条約の3つの柱



この3つの柱は互いに支えあっていっているんですね。





郁丸が探る! にいがた「瀉」伝説 ②

このコーナーでは、“猫仙人” 郁丸が、にいがたの「瀉伝説」をイラスト入りで紹介してくれます。さて毎回どんな伝説が飛び出すか…どうぞお楽しみに!

かがみ 鏡
がた 瀉

みんなは知っていたかな、瀉にはたくさんの伝説があることを! 今回は「鏡瀉」にまつわる伝説を探ってきたよ。西蒲区の瀉上、船越、横曽根地域に、昔、鏡瀉という瀉があった。瀉の近くの家の娘が井戸の水鏡を見ながら髪をとかしていたら、いつの間にかいなくなったので、さては井戸に落ちたのではないかと井戸の中を探したら、一匹の小さな蛇がいたんだ。この蛇、体のわりに眼だけが大きいので、みんなが不審に思って打ち殺したんだ。蛇は小さく化けても目の大きさだけは変わらないと信じられていたから。蛇は断末魔をあげて死に、大蛇になった。このことがあってから年々鏡瀉が浅くなっていったそうだ。蛇は古語で「カガ」というから鏡瀉は蛇目瀉だったのかもしれないね。

他にも不思議な話があるよ。鏡瀉には島があり、榎が生えていた。瀉が消えても榎は残っていた。この木の下に高貴な方が佇んでいるのを見た人がいて、その装束から天神様ではないかと噂になって村の長が京都の北野天満宮に参拝し、北野の地に天神様を勧請したのだった。

さて、今回はこの辺で。では、そろそろ次のおもしろそうな話を探りに行くか…いざさらば! (参考文献/岩室村村誌/昭和八)



鏡瀉の蛇



勝手気ままに瀉食文化探検!

アンナ隊長 「瀉を食べる!!!」②

このコーナーは、瀉食文化探検隊をひそかに立ち上げ、とりあえず隊長に就任した、アンナ隊長こと隅 杏奈(瀉環境研究所事務局研究員)が、瀉周辺地域の人々から教わった瀉の食材を実際に食べてみる! という企画。さて、今回の内容は何ですか~アンナ隊長! 今回は、瀉端地域の師匠らに「カモ」のこしらえ方を教わりましたよ~。カモン!

瀉とカモ

かつて、新潟市域では西蒲原地域を中心にカモとりが行われ、秋から春にかけて瀉や湛水田に降り立つカモは、農閑期の収入源でもありました。例えば、西蒲区の仁箇堤では、昭和初期頃からサカウチ組合ができ、坂内網と呼ばれる網でカモやタカブをとっていたといいます。(生業としてのカモとりについては『蒲原の民俗』金塚友之亟著に詳しく書かれています。)

現在、新潟市の福島瀉・佐瀉・鳥屋野瀉とその周辺は鳥獣保護区に指定され、これらの場所で猟はできませんが、瀉端地域の住民に聞き取りをすると、瀉でのカモとりの経験がある人がいました。また、例年、11月15日~翌年2月15日の狩猟期間には狩猟区域で自らカモをとり、食べることを楽しみにしている人々がいます。



カモの塩漬。保存食として作るそう。ネギと豆腐とともに汁にするのが一番美味しいそうです。(鳥屋野瀉付近での聞き取りより)

カモをこしらえる

佐瀉がある赤塚地域や上堰瀉近くの松野尾地域の人々に、カモのこしらえ方を教わりました。カモの毛を丁寧に手でむしって、稲わらに火を着けて、残りの毛をあぶってから、さばきます。毎年、自分でとったカ



昨年の暮れにカモ汁をいただきました。白菜、ネギ、ニンジン、シイタケ等たっぷりの野菜と一緒に炊いています。カモの出汁と油が染み出てとても美味しい! シメにはお餅をいれて。最高でした。

モをこしらえて、仲間や家族に振る舞うそうです。

瀉端の師匠は「これをこしらえているときが一番面白いんだ」と言っていました。カモの生態について、「夜に田でご飯を食べて、朝になると瀉や川に戻っていくんだ。朝うったカモはもみ殻がたくさん入ってる」と教えてくれました。慣れた手つきでさばきながら、「カモにはなりたくないなあ」と笑う師匠でした。

最後に、小林一茶がカモについて詠んだ句を紹介します。

春雨や
食われ残りの 鴨が鳴く

一茶は何を想って詠んだのでしょうか。
任務完了(^_^)ゞ



「潟」のエッセイ

⑥ 「清五郎開拓八人衆」を未来へつなぐ

星 伸二／清五郎倶楽部代表



新潟市の中心市街地に隣接する鳥屋野潟。その南に清五郎地区があります。潟に隣接する場所に大きな一本の松があり、そのふもとには土地の歴史を記す碑が置かれています。そして、その両側に、清五郎開拓八人衆のモニュメントが静かに立ち並んでいます。2009年の「水と土の芸術祭」で生まれた中学生の作品です。彼らは、水と共生し、この地を開拓した人々の歴史や風土を学びながら作品をつくりました。

春、一本松周辺は満開の桜で覆われ、人々の心を和ませてくれます。やがて夏の風が湖面を吹き渡り、八人衆の間隙を抜けていきます。色づく秋、そして沈黙の冬。流木や竹穂、藁などでつくられた姿は、四季折々の景色にすっかり溶け込んでいるようです。

時折、近くのベンチで憩う人たちや絵を描く人の姿を見かけます。通りがかりにカメラを向ける人もいます。新聞に応援のメッセージを投稿してくださった方もいました。こうして、たくさんの市民から愛されるようになってきました。中学校の美術の教科書にも大きく取り上げていただいています。清五郎地区の方をはじめ、鳥屋野潟漁協の皆さんは、私たちの活動に、いつも全面的に協力をしてくださっています。「一本松と碑と八人衆、これはもう三位一体だ。壊さずに残してほしい。」とのお話を何度もいただきました。

やがて6年の歳月が過ぎ、熱い日差しや風雪にさらされた八人衆は多くの部品が風化してきました。あれこれと話し合いましたが、新潟市が推進する市民プロジェクト（の一環）として思い切って解体修理を行うことにしました。広く市民に参加を募り進めるといふ企画です。地域の人たちの思いや願いが、私たちの活動の大きな原動力となりました。夏の日差しが照りつける中、延べ、約60の方が、共に汗を流してくださいました。親子での参加もありました。嬉しかったです。傷んだ部品を取り替え組み直してゆく作業は、当時の中学生の思いを一つ一つ^{たど}っているかのようでした。

もののかたちを残すだけなら、それはある意味、簡単なことです。しかし、かたちに込められた思いを繋いでいくには、さまざまな工夫や、具体的な取り組みが必要です。不安もたくさんありましたが、市民参加型で行った今回の解体修理は、大きな成果があったと感じています。地域の皆さんとの交流や、思いを寄せてくださる市民やさまざまな団体との輪が広がっています。私たちは、このような時の流れと、たくさんの方々の思いに感謝するばかりです。



清五郎開拓八人衆

新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟（さとかた）」ともいふべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>



発行

平成29年3月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook
ページ

